
もっと

ホタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もつと

【Zコード】

Z3913A

【作者名】

ホタル

【あらすじ】

人生とか人間関係とかにちょっと不安になったときに早苗は現れ、そして消えた。

だから僕は泣いた。

さなえがやつて來たから。

泣いて、ああそなんだつて思った。

この瞬間を待つていたんだと。

「ごめんね」

さなえが謝ることなんてどこにも無いのに。

まるで迷子になつた子供をあやすようにさなえは謝つて僕に触れ、抱きしめ、頭を撫でた。

だから僕だつて子供のように泣いた。ぐちゃぐちゃになつて流れる涙は僕が求めていた人生その物だつたんだと思つと余計に泣けた。

「さなえ、これだつたんだよ」

さなえはうんうんと頷いた。

いつからか何も求めていないと思つていた僕の人生は結局全てを求める、その浅はかな欲求で得られたものはとても小さく、乾いた小麦粉のように指の隙間からするするとこぼれ落ちた。僕は途方にくれ、ある日夕日を追いかけてみたけれど、僕が向かおうとすると道路があつて、建物があつて、果てしなく遠くて、簡単に僕をさす夕日をただ偉大に感じてやっぱり途方にくれて立ちつくした。

「すきって言つて」

そう言つた彼女に好きだよと言つたら怒つて泣かれた。

友達にはばかだな。つて笑われたから、僕もいっしょになつて笑つたけれど、何が可笑しいのか解らなかつた。いや、実際には解つていたのかもしれない。彼女が求めていたことを僕が気に入らなくて、それが彼女にとつて拒絶を感じて悲しんだこと。そして、彼女が求めたものを解つていながら、それを与えないことを友達は笑つた。

彼女が求めたのは絶対的な安心感だった。彼女が冬の寒い部屋に置かれる炬燵のような安心感と、その上においてある甘ずっぱい蜜柑のような刺激を求めていたことはいつだって解っていた。だけとそんな中、僕がしたいのは雪合戦だった。

価値観の違いに彼女との関係は半年で切れた。
もう彼女は作らない。

そう決心した翌日をなえとで会つた。

腐った林檎は美しい。とさなえは言った。

腐つても存在するその存在が美しいと。

そして、腐った林檎を捨てるのはいつだつて余裕がない人間なんだ。と彼女は言った。

「私はね、感情つてもつとぐちゃぐちゃだと思つる」

酔つたさなえが言った言葉に僕は頷いた。

「ほんとはもつとぐちゃぐちゃなのに、それがとても熱くて、熱くて熱くて触れるのが怖くて、一日一日が通りすぎていつてしまつ」「ぐちやぐちやなことなんて、単純な言葉じや表現できないから」
僕は何となく相槌をうつてセックスをした。

ぐだらないセックスをして、抱き合つたら、なんだかそれが心地よくて全てがどうでも良くなつて一日中抱き合つて眠りに着いた。世の中がくだらないとか、つまらないだとか、糞だとか、厭世的になるつむりは全く無かつたけれど、重要なこととか、大切なものなんてけつこう些細でだけど纖細で、脆くて壊れやすくて、すぐ埋もれてしまう。だからこそ大切なに、だからこそ、確からしさを求めてしまう。それが時には言葉や詩で、ある時には行動や表情で、またあるときは一輪の花だつたりする。

「ほんとは社会だつてぐちやぐちやなんだ」

黒い「コーヒー」を淹れながら彼女が言った。ミルクは最初螺旋を描き、そして滲んで混ざり合つと黄土色になつた。

「そうだね」

実際そうだと思った。

もつと暴力的で、欲望的で、狂氣的なんだ。

「でも、それだけぐちやぐちやだつたらこにコーヒーはなかつただろうね」

そう言つと彼女は笑つた。

「人はコーヒーを飲むために、聖書を作つて、法律を作つたのかもね」

三日間そんな話をして、抱き合ひて、コーヒーを飲んでさなえはいなくなつた。

朝目を覚ますと、隣で寝ているはずのさなえはいなかつた。さなえの行動を縛る約束も何も無いのに、当然今日も明日もいると思つていたのに、さなえは突然消えた。

僕はバイトを探した。

さなえのいない毎日はただ日の前を通り過ぎる他人のよつに通り過ぎた。

時給800円のバイト代は規則正しく振り込まれ、規則正しく所得税は取られ、規則正しくぼくは不味いコーヒーを飲んだ。

一日一日は不毛にただぶかぶかと海に浮かぶ糸の切れた浮きのようになつた。

ある日店長が驚いた。それは僕に対する驚きで、気がついたら涙を流していた。

冷たく流れる涙に僕はバイト先から逃げ出した。

人はこんなにも簡単にこんなにも冷たい涙が出るものなんだと、それがまた悲しかつた。

きっとバイトはクビになつても、今までの給料はやっぱり払われて、コーヒー代と生きていいくのに何とかなるくらいのお金は手に出来るのがなんだかひどく悲しかつた。

たださなえに逢いたかった。

ぐちやぐちやになるためには様々なことを捨ててしまつんだ。社会も、羞恥心も自尊心も、きっと全部捨ててやつとなれるのこ、僕にはやっぱり出来なくて、小さな地図の上を右往左往するよう

4

さまよつた。

お腹が空いても、何かを食べるためには金を払うことになんだか罪悪感を感じて、なにも考えず、ただふらふらと歩き続けた。

さまよつた先に、さなえはいた。

さなえがいなくなつて三ヶ月が過ぎていた。

「さなえ」

僕が言つと

「ひさしぶり」

何事も無かつたかのよつにさなえは言つた。

僕はふらふらで、さなえはとても健康そうだつた。

さなえは絵を売つていただけれど、なんだかそれは自分の人生を切り売りしているように見えた。それがさなえの才能なんだと思うとただ切なかつた。

切なさは美しいと思うと、愛しくなつた。感情は勝手に流れ、涙のように溢れるけれど、僕の存在はさなえに吸い込まれて空になつて、ここには粉々に砕け散つた。

僕も絵が描けたらよかつたのに、そうすればさなえへの想いが、表現できたかもしれない。だけど、僕は絵がかけない。

いつの間にか僕はいつかのよつに夕日を追いかけていた。さなえが僕を呼んだけれど、僕の名前に意味は無かつた。

さなえが走つてきて、僕はさなえとキスをした。

(後書き)

なんとなくこんな感じのも逢つてもいいんじゃないかと思つて書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913a/>

もっと

2010年10月8日15時27分発行